

【エッセイ・回顧】

自伝的日中貿易史

愛知大学昭和23年法経学部卒 藤井 栄

1. 愛大で中国語を学ぶ事と中華人民共和国成立

1945年4月旧制中学の3年生になった私は、教室に入ることが許されず、戦闘機を組み立てるため軍需工場に動員された。そして2回の爆弾攻撃と、3回の機銃掃射攻撃に遭い、命辛辛にげまわった。そして岐阜の自宅も空襲に遭い、自宅と共に祖父と近所の親友を失った。

敗戦になって、ヤット教室に戻ることができた。教室に戻って授業を受けると、私の全細胞が両手を出して、知識を要求しているような気持ちになる程、授業が身に沁み込んで行った。漢文は教科書の不適切と思われた箇所を黒塗りにする必要もなかった※。英数国漢といって、漢文は化学・物理・生物より主要な学科であった。その漢文の授業で蘇東坡の前赤壁の賦を習った。漢文の担任の先生の名調子の講義と三国史の解説で、私は一挙に三国史迷（ファン）になってしまった。愛知大学に入学を許されても語学の選択は迷うことなく中国語であった。

※敗戦になり授業が始まったが教科書等から、軍国主義的文言を削除できないから、そうした部分を墨で消して使用した。

2. 新中国建国の予測

1948年愛知大学予科一年生の中国語の

最初の授業で桑島信一先生は、中国の現況を解説された。当時国民党軍は米国に近代兵器を提供され、延安を占領した頃で、中共軍は敗北し国民党軍が勝利するだろうと報道されていた。私もそのように信じていた。

先生の解説は一般新聞紙のそれとは全く異なっており、国民党軍が占領したのは点であって、人民軍（人民軍という言葉も初めて聞いた）は間もなく中国を解放（解放という言葉も初めて聞いた）するであろうと解説された。ホンマカイナ！しかし事態は先生の解説通りであった。

北京・天津を解放した人民軍は長江に殺到した。三国史迷の私は、国民党軍に周郎と諸葛孔明が現われるかと固唾を飲んで見ていたが、私の期待とは関係なく、中国人民解放軍はやすやすと長江を渡河してしまった。上海は人民自身が蜂起、自ら解放してしまった。そして、桑島先生の解説通りに、翌年の10月1日には、中華人民共和国が成立した。実に壮大なドラマであった。

中華人民共和国が成立した翌年、朝鮮戦争が勃発し、中国義勇軍も参戦した。

それからは中国の人民日報等の印刷物を持っているだけで、占領法違反か何かで逮捕される時期であり、日中友好協会の設立発起人が逮捕され、その裁判の証人までが占領法違反で逮捕された。中国の解放等というだけで共産党とみなされ、勿論中国語やロシア語を習っている者は日本共産党党

員と見なされる風潮があり、中国語を第一語学にしていた50人の学友は、次年度には16人になり就職に悪影響があるとの懸念があった。鈴木沢郎先生に言わしむれば、先生の中国語を教えてきた数多くのクラスの中で最低のクラスであったようだ。

3. 学友達

クラスには、数人の北京中学・天津中学・大連中学・上海中学・台北中学等から来た学友がいた（庄垣内君・大山君・小川君・田上君）。彼等の父兄は、中国での生活基盤を失い、国内での生活基盤も固まらない時であった。しかも激しいインフレで学業が続けられなくなり、次々に辞めていった。彼等は中国語を母国語のように使っていた。彼等が、そのまま愛大に留まることができたら、日中関係で、目覚ましい活躍ができたろうにと悔やまれる。

中国語の授業は註音符号による、発音から始まった。

教科書は手書きのガリ版刷りの『華語萃編（かごすいへん）』であった。

1953年卒業の学友中、光岡君は中国研究所、古井君は日中友好協会本部に、彦坂君は中国書籍専門の大安書店に、私は日中友好協会の貿易促進運動の組織の日中貿易促進会議の名古屋事務所で働くことになった。まともに給与も出ない中で、古井君と彦坂君は病を得て、帰郷し、それらの職から離れなければならなかった。古井君は病を癒えて、名古屋の日中貿易の会社に勤務するようになった。何処もまともに給料は出なかったのが、苦労していたが私は岐阜市出身で、父母の元から通勤することができたのと、学生時代の貧窮に慣れていて、給与がなくとも、凌ぐことができた。その

年の暮、2ヵ月分の給与が出たので、初めて時計と背広が新調できた。

台北中学中退の小室一郎君は、愛大事件の容疑者にされ、肢体不自由者であったため、普通の卒業就職の途を断念し、東京の人形劇団に入った。その劇団でNHK「ひょっこりひょうたん島」等の製作に係わり定年まで勤めた。彼は学生時代から音楽的才能が優れ、一度聞いた歌はすぐに覚えてしまう能力があった。中国語の学習にも異常な才能を発揮した。数少ない愛大女子学生を射止めて、私達を、悔しがらせた。そんな才能も持っているとは気付かなかった。ウカツであった。

4. 漢字簡略化共同研究の呼び掛けを蹴った日本政府

反共思想の日本政府が、中華人民共和国成立を歓迎しないのは、当然のことと推測されたが、しかし米国の中国封じ込みの意向を先取りし、忖度し、阿諛（あゆ。「ヘツライ」の意）して、中国の国連復帰を頑強に阻止し続けた。その挙げ句米国は日本の頭越しに中国と国交回復してしまった。米国の忠実な番犬の佐藤内閣も立場がなくなって退陣に追い込まれた。

その頑迷さと米国への阿諛のため、中華人民共和国成立後まもなく中国科学院から、漢字の簡略化の共同研究の呼び掛けがあり、日本国内朝野の賛同の声を無視して、呼び掛けられること自体が、ケガラワシイと言わんばかりに蹴ってしまった。経験の少ない未熟な学生であった私でも、いかにも度量が狭いと感じた。

日中関係の改善は常に中国側の積極的な働き掛けがあったものの、中国を敵視する日本の保守政権の度量の狭さと、米国への

過度の阿諛によって潰されてきた。

中華人民共和国成立の翌年（1950年）英国は中国を承認。日本政府は英国の中国承認を抗議した。講和条約締結交渉には日米両国とも、最初から中国除外を意図した。国内の激しい全面講和要求を無視し、中国除外の単独講和を強行した。「中国を外すなどヤクザの仁義にも劣る（作家 野上弥生子氏発言）行為であった。

5. 芋と愛知大学

愛知大学が豊橋に創設された大きな原因に食糧事情があったとされている。自分達の学力以上に、東京や関西方面は食糧事情が悪いと、最初から敬遠した。

それと私は親からの支援は全く期待できなかったため、入学と同時にアルバイトしなければならなかった。アルバイトするには学生寮が絶対に必要だった。

思草寮の2号室は旧軍隊の一個班の居住部屋で4人が同室であった。3年生は台北高校中退者。2年生は竹井廉商法教授の子息で京城中学中退者。新入生は私と舞鶴中学出身の近藤君の4人だった。入学入寮の手続きの事務所前に行くと新聞配達員募集の貼紙があった。「良かった、此れで学生生活が送れる目処がついた」

毎朝5時までには現在の豊橋市役所近くにあった旧兵舎の中の新聞社に行くことで採用された。早朝のため市電はまだ運転されていないから、歩いて行くことになった。4時起き。4kmの道は学生生活が送れることの嬉しさで、問題でなかった。翌日から新聞配達をはじめた。

学生寮食堂の北の北門の前にサツマ芋を蒸かして、一皿10円で食べさせてくれる家が数軒あった。寮食堂の食事は配給内で

賄うため、常に量が不足し、食事の後に蒸かし芋を食べに行かなければならなかった。寮の食費一ヵ月4～5百円の時、一皿10円は決して安くなかった。翌年(1949年)になると食糧事情も好転し、蒸し芋屋サンの世話にならなくてもよくなったが、私はアルバイトで芋飴工場（豊橋市弥生町東豊和で、現在は王寿園という大きな老人ホームになっている。経営者は同じ石原氏であり、小松原に本部がある。今も親しく、付き合いをさせてもらっている）で働くことになり、毎日朝2時頃より7時頃までの作業で卒業まで続いた。

本間先生が懸念された食糧問題は、先生の懸念通り忠実に全面的にサツマ芋で食事し、学費まで稼がせてもらって愛大を卒業できた。或る先生から大学院への進学を進められたが、とてもアルバイトを続ける気力は失せていた。

何が何でも大学を卒業したかった。一切の部活はできなかった。喫煙・飲み歩き・ゼミの合宿等の余裕もなかったが、アルバイトを休むこともできなかった。私が休めば、工場も休まなければならなくなった。

6. 中国語教室からの追放

このアルバイトのため、朝一時間目の中国語の授業は、眠くて仕様がなかった。授業の度に眠るため鈴木先生に失礼な学生として、教室を追い出された。しかし友人の南君が、僕の代わりに弁明に行ってくれた。先生に呼ばれて研究室に行くと「苦勞して学校に来ているのだな。眠っても好いから授業に出ろ」と御許し頂いた。妙なことに、それから私の中国語の成績は上がった。

中国語を学ぶ寮生は早朝運動場に呼び出

され、念書（声を出して本を読む発音練習）の指導を受けた。先輩に「大地の子」の著者山崎豊子サンの弟サンがいて、念書の指導をしてくれた。

中国での日本工業展覧会の準備事務局に、私は東京へ出向して仕事をしていた時、伊藤忠商事のダミー会社※の事務所で山崎先輩から声を掛けられ、久闊を詫びた。私が文革に賛意を表さないということで、日中関係から追放された後、山崎先輩は家業をついでおられると伝え聞いていたが、山崎豊子サン自身が日中友好協会の機関誌に、弟は文革の犠牲者であったと記しておられた。ダミー会社だけに文革闘争は、激しいものだったと思われる。私は新聞配達のアルバイトのため、念書の席には時々しか、参加できなかった。そのため今も中国語の発音に自信がない。

※大手商社は中国以外の国との影響を考え、別会社の名で日中貿易をした。三菱商事は明和通商、三井物産は第一通商等。

新中国が建設され、その中国から「解放された中国」というニュース映画が、秘かに豊橋校舎の教室で上映された。警官隊が襲い掛かってこないかと、交替で警備して観賞した。解説は桑島先生であった。

鈴木先生との聞を取り成してくれた南君は、学生時代に素晴らしく、美しい彼女を射止めた。紹介されて私は日本人形のような可愛らしさと美しさに打たれて、まともに物が言えなかった。彼女が電車に乗ってくと、電車の中の会話が一瞬止まることがあった。南君も種種苦労して大手商社で日中貿易に関与するようになったが、その時私は日中関係から追放された後だった。一緒に仕事はできなかった。その彼は50歳になる前に、美しい夫人と2人の子を残して急死してしまった。「勿体ない」と思う

が「何が勿体ないか」と尋ねられると返答に苦しむ。

7. 初めての訪中

新中国誕生後、初めて北京・上海で日本商品展覧会が開催され（1956年）、私はその要員となり、初めて中国に渡航できることになり、鈴木先生の自宅に挨拶に行くと、先生はその時「君のクラスは最低のクラスだった。そのクラスの中で君の中国語は最低だった。その君が最初に中国へ行くのは、世の中間違っている」と揶揄しながらも喜んで頂けた。翌年、愛知県の平和代表団の副団長として、鈴木先生が訪中され武漢市に來られた。その時私は「武漢・広州日本工業展覧会」の職員として武漢市にいた。先生の宿舎を探して駆け付けた。至福の時だった。

勿論展覧会場で先生と写真を撮った。この写真は今も私の宝である。

桑島先生にも挨拶に行った。先生は我が事のように喜んで頂いた。

先生は東亜同文書院在学中、反戦運動で検挙されたことがあった。新中国の幹部には、昔の同志もいたことでしょうが、文革に賛同されなかったため、生前、先生は新中国を訪れられる機会はなかった。商社に努めておられた子息と北京で会った折り、そのことを尋ねました。先生の遺骨は八達嶺で散骨されたとのことでした。

桑島先生には、是非とも中国で会いたかった。反戦運動のことを聞きたかった。

8. 中国建設と日中貿易

新中国建設に在日留学生達や華僑達にも大きな波紋を及ぼした。当時愛知大学にも

劉省三という留学生がいた。北京出身とのことであった。彼等は祖国建設に役立つことを夢見て、続々帰国して行った。1956年の訪中の時に、劉氏と北京で会いたかったが、連絡が付かなかった。

日中貿易促進への運動は、新中国成立以前に中日貿易促進会が結成された。

1950年帰国する華僑に密かに新中国の貿易部長宛て手紙を託した。すると中国から中日貿易促進会宛てに、天津のNOCIMORに連絡とってほしいと電報があった。これでヤット新中国誕生前に取引できる相手が判明した。

日本の貿易は当時占領軍、GHQの管理下に置かれていた。日中貿易も例外でなかった。1950年3月に日中貿易の許可を発表したが、同年6月朝鮮戦争が始まると日中貿易全面禁止になった。

9. 朝鮮戦争休戦とモスクワ経済会議

1951年ソ連のマリク国連代表から朝鮮戦争休戦の提案があり、休戦会談が始まり東西の緊張緩和と通商の気運が盛り上がってきた。そうした中で中国人民銀行総裁名で、モスクワで国際経済会議を開催するが、参加して、人民の生活水準引き上げを研究しようという趣旨で、日本の代表的な経済人や政治家に案内が来た。しかし日本政府は「身体財産の保障ができない」との理由で旅券の交付を拒否した。日本政府が言う「鉄のカーテン」の内側を日本国民に報せたくなかった。

しかし日本の3人の国会議員が、ヨーロッパ視察旅行から、モスクワに渡り、新中国成立後、日本人として初めて北京を訪問し、日本国内に大きな波紋を及ぼした。東京・大阪での報告集会には何万人の人々

が詰め掛けた。名古屋では大須球場で報告会が開かれた。私も聞きに行きたかったが、豊橋から金山までの電車賃が都合付かなかったのと、アルバイトを休むことができなかった。私は報告を聞くことができなかった。

名古屋の場合は聴衆が「日中貿易即時開催！」等のプラカードを掲げて退場して来たのに警官隊が襲いかかり、大須騒擾事件に発展した。私も電車賃とアルバイトが休めたら、大須騒擾事件の被告にされていたかもしれない。

そんな騒然とした折りに、私は日中貿易促進会議の名古屋事務所で働くことになった。事務所は名古屋市昭和区滝子の味噌醸造工場の離れの借家であった。電話も味噌屋サンの取次ぎであった。私共事務局員に公安調査庁の調査員が付きまとい、買収して情報を収集しようとした。一時私が病を得て、父母の元で療養していた時、鶏卵を持って見舞いに来た。しかし私の父は養鶏業をしていたので、御持ち帰り頂いた。私への公安調査庁の付きまといは、私の国際貿易促進協会解雇後なくなった。

日中貿易促進会議の事務所は、その後水夫（かこ）町会員サンの名古屋支店の一室。次に伝馬町に。その頃（1950年代末）から日中貿易の実績も挙がり、東京・大阪で中国展覧会が開催され、北京・上海で日本商品展覧会が開催されるようになると、給与も地方公務員並みができるようになったが、ボーナスは支給できなかった。日中貿易促進会議の各組織は自給自足で、ボーナスは終いには支給されたことはなかった。

健康保険や社会保険は1960年代になって、取り入れることができた。

日本商品展覧会事務局に出向できると、世間並みの給与が支給された。

日中貿易促進会議は日本国際貿易促進協会に改組され、名古屋事務所は東海総局になり、年配者の事務局長が来て、私は自由に外向できるようになった。

それから続けての中国での展覧会の度、私は東京展覧会本部に外向した。

中国の展覧会が日本で開催される時も、私は応援要員として外向し、名古屋で開催予定の中国展覧会の準備をしていた。

種種外向できるようになり、「アジア・アフリカ連帯委員会」の経済委員会の事務所をインドネシアのジャカルタで開設することになり、その駐在員の話が私の所に来たが、途中インドネシアでクーデターがあり、スカルノ大統領が失脚し、ジャカルタでなくエジプトのカイロになった。カイロは漢字圏でなく、あまり気が進まなかったもので、別の人になった。「アジア・アフリカ経済委員会」自身も、スカルノ氏の失脚。後の中国での文化革命の影響を受け、どうなったか私は知らない。北朝鮮ピョンヤン駐在員の話もあったが有耶無耶になった。一番希望した北京駐在員の話は最初あった後、私自身が日中関係から追放されてしまった。

日中関係から追放された後、ベトナムのハノイで、ベトナム戦争終結後、日越貿易促進のためベトナム語学習の要員派遣の話が来た。妻子がいなければ、他人を押し退けてでも行きたかったが、二人の子持ちに成っていた。私と一緒に日中関係から追放された若い佐藤資氏を推薦し、彼はアメリカのベトナム爆撃中も、ベトナムに留まりベトナム語を習得し、今、日越貿易で働いている。

10. 10日掛かった北京までの旅行

1956年北京と上海で日本商品展覧会が開催された。私はこの展覧会の職員として、初めて訪中することになった。しかし当時中国の北京にも何百人という日本人を受け入れる宿泊設備がなく、人を入れ替えて訪中しなければならなかった。私が宿泊できたのは、阜成門外の中国人用の招待所であった。

当時は国交未回復で、すべて香港経由で訪中した。岐阜の父母の家を夕方7時に出発し、岐阜午後8時発の夜行列車で上京（新幹線は未開通）。2日目の夜羽田発のプロペラ機で出発、途中、沖縄で給油。3日目の朝、香港空港着。4日目の朝香港発羅湖行き電車に乗り、国境の町深圳で中国入国、深圳から汽車で広州着。4日目の晩は、広州の愛群ホテルに泊り、夕食に初めて食べる肉料理が出た。何の肉かと尋ねると「田鶏と言います」。田鶏て何だと尋ねると「青蛙」と答えた。蛙（ワー）の意味は分かったので、養殖しているのかと尋ねると、手を上下させて捕らえる格好をしたので大笑いした。中国入国第1日に最初に使った私の中国語も、何とか大恥掻かないで通用した。

5日目広州から列車で北上した。車中で2泊、7日目に武昌着、船で長江を渡り7日目は武漢泊。8日目朝また列車で北上。10日目の夕方に北京着。10日かかった。好い旅だった。

その後、私はこの旅を4回、往復で計8回行った。列車は軟席寝台車で一部屋4人だった。朝食は8毛。昼は1元。夜は1クワイ2（1元2毛）でビール付き。

3年前豊橋でサツマ芋で腹を誤魔化してきたのとは大違い。兎に角私にとっては目

も眩む程豪華な楽しい旅行だった。深圳で入国すると、プラットホームに郷愁を誘う、優美なバイオリンの音楽が流されていた。何の曲だと駅員に尋ねると「思郷曲」で作曲者と演奏者の名も調べてきてくれた（中国音楽院の馬恩聡であった）。この曲は今も私の大好きな曲であるが、今の中国国内で聞くことができなくなってしまった（後記、CDもレコードも買うことができない）。

11. 日本商品の輸出と表面日中貿易促進。 裏で妨害

日中貿易は日本政府が米国の意向を忖度して、いろいろ輸出制限をした。1953年日本から中国に輸出できる商品は繊維機械・自転車・ミシン（工業用は不可）・寒天（培養用は不可）の4品目であった。輸出の第一号は、清須市の豊和工業の2万鍾の紡績機械であった。名古屋港から第一船が出た。岐阜県の寒天が大量に輸出された。中国が培養用に使用するか否かは、規制の仕様がなかった。促進会議の事務局が勝手に培養用でないという、証明を出すか否かで、話し合っている間に、当局も「培養」云々することが無意味と感じたのか、証明の提出を要求しなくなった。しかし輸出品の制限は英国・ドイツ・フランス等西欧諸国に比べ大幅に強かった。せめて西欧並みの緩和が要求された。日本政府の対中国貿易の姿勢の悪さが目立った。日中貿易促進は国会では決議されたものの、実際の施行には、種種制限を加え簡単に許可されなかった。すべて東京の本庁経由で数十個の承認印が要求された。そうした意地悪い制約を一つ一つはね返すために馬鹿臭い労力が必要だった。そうした無駄な労力のため、どれだけ腹を立て、憤り、自分の命を切り刻ん

だと、今だに怒りが納まらない。

12. 中国からの初めての貿易代表団来日

1955年3月初めて新中国から貿易代表団が来日した。東京と大阪に行くことになり名古屋にもぜひと、東京本部に働きかけ1泊2日で来名してくれることになった。

その時私は愛大卒業後まだ3年目だったが、名古屋事務所の責任者になっていた。（別に出世したのではなく、前事務総長が、給料が出ないため生活できなくなり、辞めてしまった）。代表団受け入れのスケジュールから、受け入れ経費捻出に駆けずりまわった。業界では若いチンピラであることが、大変なハンディであり、それに共産党員だという先入観で見られているため、話がより混乱してきた。それでも名古屋市長が歓迎夕食会に出席してくれたし、紡機を輸出した豊和工業と別の会社の名古屋工場が工場見学させてくれたので、一応格好はついたが、工場見学に私が同行することは、やんわりと断られた。

そんな折り、刈谷市の豊田自動織機に別の用で訪問して、日中貿易全般の話をして、代表団受け入れについてボヤいたら、面談していた自動織機の輸出課長が「藤井サン、チョット待ってくれ」と立ち上がり何処かに行った。そして数分後に戻って来て、「社長に会え」と言いました。自動織機の社長は石田退三氏で、トヨタ自動車の社長も兼ね、トヨタグループの総帥的存在だった。社長どころか担当者との商談さえ困難な時に、トヨタの総帥との面談など、想像もつかなかった。カッと昂揚して社長室に案内された。石田氏は日中貿易促進の仕事を尋ねた後、「代表団を連れてこい。断るような失礼なことはしない」と明言された。し

かし代表团は名古屋から外には出ないことが来名の条件でもあったので、お断わりせざるを得なかった。その後も中国やソ連大使が来名した時など案内状を送付しておく、気楽に時にはトヨタ自動車の中川副社長同道でホテルに来られた。それから私は石田退三氏とトヨタのファンになってしまった。世界的な大企業になるだけにすごい人達だと感服してしまった。それから何十年も経過したが、その時の感激は今も持ち続けている。

13. 日本商品展覧会への出品制限

1956年、北京と上海で日本商品展覧会が開催されることになり、各企業への出品の勧誘等に駆け回り、東京本部の準備作業に出向した。

関係者は少しでも高い技術の商品を展示したかったが、ココム・チンコム違反ということで、展示さえ認めなかった。この展覧会には工作機械は殆ど出品できず、展覧会場のメインホールは織物工場のように、繊維の織機が盛んに機音を立てた。自動車は一切展示不可。エンジン付きは單車と農業用の耕転機。事務局使用ということで小型乗用車を持って行った。わざわざ展示しないと確約させられた。この乗用車は中国国際貿易促進委員会に寄贈した。

1958年武漢と広州で第2回目の日本工業展覧会が開催された。私は引き続いて展覧会要員として、東海地方業者の出品勧誘と東京本部出向をした。今回は自動車の出品は認められた。当時の全オート三輪メーカーが出品した。しかし新しく総理に就任した岸信介氏から急速に、積み上げられてきた日中関係は悪化してきた。折り悪く日中間に不幸な出来事が続発し、その対応が

素人でも拙劣だと感じさせる無神経なものであった。（戦時中、日本に強制連行され、13年間逃げ回っていた劉連仁氏が北海道の雪の中から発見されたのを「スパイではないか」と発言した。長崎市で日中友好協会が「中国物産展」を開催し、中国国旗を会場に展示していたのを、右翼の暴漢が引きずり降ろしたのを、中国とは国交が回復していないから、国旗としてでなく、器物損壊として暴漢を処罰すると声明した。途端展覧会場に備えてあった留言一メッセージ一簿の記入論調が変わった。展覧会場正面には、国旗掲揚塔があり、日本の「日の丸」と中国の「五星紅旗」が掲揚され、中国解放軍の兵士が護衛していた。論調は「五星紅旗」は一度も外国を侵略したことはないが、我々は太陽旗の元で、どんなに苦しめられたか。展覧会場の太陽旗を直ちに降ろせといったものになり、自然発生的にデモが行なわれるようになった。そして日中間の民間交流も途絶し、私達中国滞在者も帰国せざるをえなくなった。岸信介氏は、現安倍首相の祖父にあたり、日中国交回復を妨害し続けた佐藤栄作氏は岸信介氏の実弟になる）

14. 民間日中貿易の再開か

日中民間貿易を破壊した岸内閣は60年安保闘争で退陣させられた。それをきっかけにして、民間貿易の話し合いが詰められてきた。勿論日中国交回復を念頭に日本政府に規制緩和を要求し続けた。1963年第二回目の北京・上海日本工業展覧会の開催が決まり、私は東海地方の業者の出品勧誘と共に、東京本部にも出向した。過去2回の展覧会の経験で、今回も展示品に制限を加えてくるに違いない。展示品以外で日本工

業の技術紹介をどのようにするか、検討して、展覧会機構に「技術交流室」を設置することになり、交流室長は私が担当することになった。私は技術者でないからと危惧する向きもあったが、しかし私の仕事は日本の技術者の紹介技術内容の水準に見合う中国側の技術者を組織することだと思い、いわば組織者であると割り切って準備作業をした。そして技術紹介映画の提供も企業に求めた。

その結果、私は各企業の高級研究者や技術者と面談し、技術紹介映画を見、各工場を見てまわった。その結果、展示さえ認められなかった、石油精製プラント、製鋼プラント、半導体精製技術・加工機械等の技術者やフィルムを紹介することができた。こうした日本側の努力に中国側も反応してくれ、技術弁公（事務）室を設置した。中国側弁公室長は米国均氏（日本東京工業大学出身、のち中国初代国連大使）であり、通訳に同じく東京工業大学出身者があつた。日本側の準備経過を説明し、一人一人に映画内容を紹介すると、米国均氏は日本側の努力を称賛してくれた。日中両国の合作（協力）が成功したと思った。その後日中間の個別なプラントの話や技術交流のきっかけになったと自負している。

ソ連が崩壊する前、日本の大手工作機械メーカーの社長がココムに違反して、ソ連に工作機械を輸出したとして送検されたというニュースを聞いた。これには2つの事で驚いた。未だにココムという時代錯誤的法律が日本に残っていることと、送検された社長が、この展覧会の技術交流の、私の最も推奨できた高級技術者であることであった。同氏は自社出品の工作機械だけでなく、日本の工作機械の水準を紹介できた人であった。同氏のその後の消息は聞いて

いない。

15. 中国人日本語通訳達

北京・上海日本商品展覧会が開催され、中国側も全国から日本語ができる人を集めたようであるが、日本に帰国しないで、そのまま中国に住んでいる人もいた。東亜同文書院の中国人クラスに居た人も来ていた。1963年の展覧会のおり、陳という若い人の日本語を聞いて驚嘆した。歌舞伎役者やNHKのアナウンサーと比べても勝るとも劣ることのない、歯切れのよい、素晴らしい日本語であった。当然「どうして」という質問になった。日本で新劇の劇団に所属し、秋田雨雀サンの弟子であった。日本の歌舞伎ワラビ座が北京公演した折り、団長と知り合いだと喜んで会いに行った。私は3度の中国での展覧会で、多くの日本語のできる人々と、厚い友情を結ぶことができた。その後も一部交流が続いたが文革が発生して、どんな疑念が彼等に罹（か）るかもしれないと、交流を断った。彼等のその後の消息を知りたいと切に思う。国家主席が死に追いやられ、中国国際貿易促進委員会主席の南漢宸氏が自殺に追い込まれたことを思うと暗い気持ちにされる。国交回復後10度程訪中しているが、恐くて彼等の消息を聞かないでいる。

上海での展覧会の折り、私の相棒になった中国側の副責任者は馬思湖氏で、誠に人品卑しからざる風貌の年配者であった。一目見ただけでタダモノでない風格の人であった。仕事の暇な折りの雑談で、私は「思郷曲」の話をし、是非レコードを買って帰りたいと話したら、他の人が馬氏を指差して、「馬サンのお兄さん」と紹介してくれ、馬氏はヨーロッパに留学していて、奥サン

はヨーロッパ人であるとも話してくれた。馬氏は文革の時、米国に亡命した。「思郷曲」を中国で演奏されない理由が分かった。

16. 日本共産党と中国共産党の決裂

1966年には名古屋と北九州市で中国展覧会を開催することに決まっていた。その年の3月日本共産党の代表団が、ベトナム・北朝鮮・中国を訪問、それぞれで共同声明を発表した。中国との間にも共同声明発表の骨子は決定していたが、日本共産党代表団が最後に上海で、毛沢東と会談した折り、毛沢東はその骨子にソ連社会帝国主義反対の項目を入れることを要求、日本共産党がそれを拒否すると、中国にとって「戦闘的友誼の党」である日本共産党は、中国4つの敵（アメリカ帝国主義、ソ連社会帝国主義、日本反動分子と日本共産党）にされてしまった。その以前から中国に滞在する日本人の住むホテルの彼方此方に、国際共産運動に関する中国共産党の主張の日本語のパンフレットが置かれていた。自由に持ち帰り読むことができるようになっていた。其処へ中国の文化革命の論理が持ち込まれた。

北京に滞在していた日本共産党の代表と『しんぶん赤旗』の記者に北京空港で、北京在住の商社等の日本人が襲いかかり、リンチを加えた。中国当局者は現場に居ても止めようとしなかった。

17. 文化革命論理の持ち込み

北九州市と名古屋での中国展覧会に中国品の即売が行なわれることになっていた。即売品の中に中国の書籍も含まれており、その中に日中共産党が決裂した経過を記し

たパンフレットも含まれていた。即売関係で中国展に協力していた日中貿易促進会の役員がそれを売ることを断ると、中国側は日中貿易会を「非協力団体」と非難し、同貿易会を解散に追い込み、従業員への退職金等の支払いを「敵に塩を送る行為」と非難し、失業保険や退職金の支払いにブレーキを掛けた。

そんな北九州や東京の動きに私はあまり関心を持たず、名古屋での開催準備に奔走していた。中国の展示品が会場に搬入されたのにも拘らず、警備員の配置が遅れていたのも、私は会場内の展示品梱包箱にムシロを敷き、泊り込みをした。

しかし関心を示さなかったことが「文革」反対の行為と見られ、中国側から直ちに呼ばれ、一種の踏絵のような質問をされた※。私は実際よく分からなかったのも、勉強不足で分からないと答えた。その答えは、文革に反対する意志表示とされ、「藤井追出しの自己批判会」が開催され、自己批判を要求された。私は「私の態度が粗暴で皆に迷惑掛けたかもしれない。それは自己批判するが、その他の思想的なことや日中友好に反するような行為は一切していないから、自己批判の必要はない」と答えると、自己批判会を主催した者達は、一斉に立ち上がり、会議を続ける必要ないと解散した。展覧会の役員（会員業者 太平製作所 田中社長）に、中国側から直接「藤井等妨害分子（展覧会役員 大橋満男氏：日中友好協会事務局長、石川賢作氏：現日中友好協会愛知県連合会長・当時展覧会宣伝部長、藤井栄国貿易促進協会事務局長：展覧会業務部長）の排除か展覧会の中止かと詰められていたようだ。私は「展覧会の準備は基本的に完了しているから、身を引きます。事務所に帰って中国以外の業務をしています

す」と答えた。田中氏は「不本意だろうが、そうしてくれ」ということで話はついたと私は思った。しかし続けて国際貿易促進協会から懲戒解雇を告げられた。敵に塩を送る行為として、退職金どころか、失業保険さえ取得できない措置をとってきた。妻子を養うため、翌日からでも、私は働かねばならなかった。2～3の商社から来てほしいと連絡があったが、私の解雇の原因から、私が勤める会社は即時日中貿易停止に追い込まれることが分かっていたので、感謝して御断りしなければならなかった。即売の準備を一緒にやってきた商社の人達も、心配して連絡してきたが、これも謝絶しなければならなかった。

※私に踏絵のような質問をした中国側の責任者は任建新氏で、のち中国の最高裁判所長官になった。日共産党会談が行なわれ、両共産党の関係は修復した。その報告会が東京で行なわれて、私の所にも案内が来た。勇躍して私は参加した。会場に金丸先生と同級生の杉本君。3人で飲んだビールの味は生涯残る味であった。3人一緒に写真を撮った。これも3人の記念すべき宝の写真である。

文化革命の支持を表明した者は、支持が本物か否かということで、次の闘争が要求され、夫婦・親子・兄妹で批判しあい、闘争することが求められ、日中関係から身を引かざるをえなくなった例が少なくなかった。逆に兄弟で文革万歳で国貿促に残ったものの、義理の兄の2人と決別になった者もいる。辛い思いをしたことだろう。

18. 文化革命の結末

文革は中国国内でも、完全否定され、とても「革命」に値しない騒動とされており、批判を浴びた人々も名誉回復された。私達

のような日本人の名誉回復はなく、国交回復後も、私は二度も渡航ビザの申請をしたが、二度共ビザは下りなかった。下りない理由を尋ねたが、担当者は困惑した顔をしたので、理由を察する事ができた。

私は文革以前は毛沢東を非常に尊敬していた。中国国内では孫文も毛沢東と同様尊敬されていた。その理由は好く分からなかった。その後孫文の民国大統領就任の挨拶を読んで、孫文の偉大さと毛沢東の卑劣さを悟った。

「専制政府既に倒れ、国内に変乱無く、民国が世界に卓立し、列国の公認するところに至れば、斯の時、文は当に、大統領の職を解くべし、謹んで、ここに誓う」

(辞任予告の就任誓詞であった。陳舜臣「青山一髪」より)

私は一旦日中関係から追放され、元の職に復旧することはできなかったが、日中友好の気持ちは、変わっていない。私が日中関係で不当な目に遭って居る時、中国人民も不幸であるだろうと思っていた。その通りであった。

文革万万歳で担ぎまわり、日本人に迫害を仕掛けた若者がいた。彼は連合赤軍の一人として仲間に総括(殺)された。その女房は生まれた子供を放棄して、山の砦から逃走した。

藤井 栄

岐阜県岐阜市出身 1930年生

1948年旧制愛知大学予科1年入学

1949年新制愛知大学法経学部編入

1953年愛知大学卒業